慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	女子教育における裁縫の教育史的研究： 江戸・明治両時代における裁縫教育を中心として
Sub Title	
Author	関口, 富左(Sekiguchi, Fusa)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1980
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.20 (1980.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000020-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に対して促進の効果を示したが，一般的には単眼弁別原訓練の習得水準に依存してこれらの効果が現われる。5) 左右各眼で同一の鏡像弁別を併行して訓練した場合，多くの日数を要したが，結局は習得され，従って効果の矯正が可能であるなどの点が明にされた。

著者はこれらの結果を解釈する上に伝達経路の解剖学的構造に加えてⅠ部で想定された使用眼が弁別刺激となるという機能的側面の仮説に基いた見解を述べている。即ち，使用眼に受容される刺激は被験体の正中線に対して外側或は内側として捉えられ使用眼が変ることでこれが逆転し，通常の状態ではこれを補正し得ない結果，鏡像逆転効果を生じる。しかし特定条件下の訓練によって補正されることから，この効果が単に解剖学的構造によるものでなく機能的側面をもつことも主張されている。

著者の両眼間転移，鏡像逆転効果に関する主張を再求心性興奮の模型に結合して完全に実証するためにはさらに広範囲の条件分析と実験的研究が要請されるとはいえ，この主張の下で行われたⅠ部の実験的研究は，条件性弁別下の外的刺激布置と使用眼との機能的関連を明にし，現象としての鏡像逆転効果の解明にも多くの示唆を与えている。また，Ⅱ部で行われた実験的分析は鏡像逆転効果の特徴を組織的に明確にし，新しい事実をも示して斯方面の今後の研究に多くの寄与をなしている。

著者は本論文によって文学博士の学位を授与されるに価するものとみなされる。

博士（乙）

教育学博士

第1023号　関　口　富　左　昭和54年3月16日

和洋女子専門学校本科（旧制）

（大正2年3月26日生）

女子教育における裁縫の教育史的研究
——江戸・明治両時代における裁縫教育を中心として——

〔論文審査担当者〕

主　査　村　井　　実

（慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員 文学博士）

副　査　西　村　　皓

（慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員）

副　査　中　山　一　義

（慶應義塾大学名誉教授 文学博士）

副　査　石　川　松太郎

（和洋女子大学文家政学部教授）

〔学力確認担当者〕

村　井　　実

（慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員）

西　村　　皓

（慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員）

〔論文審査の要旨〕

著者は，本論文においてまず，江戸時代から明治時代に及ぶ裁縫教育が，理念・教材内容・指導法等の諸側面で遂げえた個別的・総体的発達過程について詳細な調査を行い，その実態の究明に力を注いでいる。次いで，かかる裁縫教育の発達が，女子教育史上，すなわち女子をしてその特性を活かしつつ真の「人間」にまで成長を遂げしめる過程のなかで，果たしえた役割ないし意義に関する史的考察を試みている。それゆえ本論文は「裁縫教育の発達過程を踏まえた女子の人間形成に関する史的研究」とも称せられるべきものである。

如上の本論文にみられる研究内容および方法について，特筆に値すると思われる諸点を以下に摘記する。

第一は，豊富な記録・文書・文献類を取り上げ，その一つ一つに資料としての価値吟味を施した上で，系統的に整理・整序し，本論文のテーマとするところに役立てようとしている点である。特に『裁物秘伝抄』（氏孝著，元禄三年刊）をはじめとする近世の数多い裁縫書，往来物，また『小学裁縫』（五木一著，明治七年官許）など三十七種に達する近代学校用の裁縫教科・書教授書を取り上げ，それぞれの作者の編集意図・方針，技術習得に必須として採録している諸教材とその組み立て等について，きめの細い調査・検討を加えているところに，この特徴を指摘できる。わけてもこれら諸文献に収録されている多数の裁方図に精緻な分析を施し，ここから各作者の教育理念や指導法上の配慮を読みとろうとする研究作業は，これまでの教育史研究では，絶えて行われなかった新しい試みとして注目に値する。（第一編第二・三章第二編第六章）

特筆の第二は，研究の対象を，江戸—東京のごとき大都市に限らず長野県はじめ広汎な諸地域にまで，また国公立の学校にとどまらず寺小屋・私塾・私設の初等・中等学校にまで拡大して研究成果の充実をもとめている点である。特に幕末から明治初年にかけての塾や女紅場等の私的教育施設についての研究は，従来の教育史研究において閑却に付されがちだった分野であり，ましてここ

で実践された裁縫教育の研究は，「全く」といってよいほどに放置されてきた。本論文は，ここに研究史上で荒蕪の地に貴重な一鍬を入れたものと評価できよう。（第一編第四章，第二編第一章）

第三に，裁縫を女子教育史全般の流れに位置付け，その役割と意義とを明確にしている点を指摘できる。

著者によれば，江戸時代は今日にいう「和服・和装」の完成期であり，これに伴なう裁縫教育が近世的家族制下の家庭生活に一つのパターンとなって定着をみた時期である。教材や指導法に一定の型が形成されたのみでなく，厳しい家族制度に制約を受けつつも，裁縫教育に，実技の習得を中核としつつ広く徳性や情操の育成をも含ませる総合学習を期待し，女子を真の「人間」にまで成長させる契機たらしめようとする指導理念が，普及して一般化するに至ったのである。

明治時代に入り，欧米先進諸国にならう近代諸学校の成立・発達に伴ない，また反面，家庭教育の機能が低下ないし縮少するに及んで，裁縫は次第に「教科」の一つとして学校教育のうちに組み込まれるに至った。かくて裁縫は，近代女子教育にふさわしく，学習内容にも指導法にも，施設設備にも著しい改良が加えられて，江戸時代に比し格段の進歩を遂げえた。

しかし同時に，著者はこの裁縫について，実技の習得にのみ特徴をしぼり込む教科に指定されたいという事情のため，前時代に見られた裁ち縫いを通して人間の全面発達を期するという教育理念や実践が没却されがちとなった事実を指摘する。こうして近代の裁縫教育は一種の技術教育として発展したわけである。

裁縫教育の歴史的意義およびその変遷についてのこうした観点からの研究の意義は大きい。裁縫教育を技術教育として見る研究に限っては，従来にも見るべき研究業績が公表されている。また女子教育史の研究に関しても然りである。しかし著者は，飽くまでも裁縫教育を人間教育の立場からとらえようとする。このような立場から裁縫教育と女子教育との内面的なかかわりを深く追究したのは本論文をもって嚆矢とするといってよい。

最後に，前項とも関連するが，著者が家族構成・家庭生活での女性の地位・任務・仕事の内容にみられる史的動向に注意深い眼を配りつつ裁縫教育史の把握に努めている点を挙げねばならない。このために，本論文は，家政学における家庭経営学的観点の重要性を歴史において指摘しつつ検証しようとする側面も併せもつこととなっており，一々例証の煩は避けるが，この面での成果も相当に挙がっているものと目される。この意味では，本論文は教育学・教育史学の研究に対してのみでなく，家政学・家政史学の研究に対しても寄与するところが大であると考えられる。（第一編第一・四章，第二編第一・七章）

以上が審査の結果であるが，この結果によって，本研究は学位請求に十分に値するものと考える。